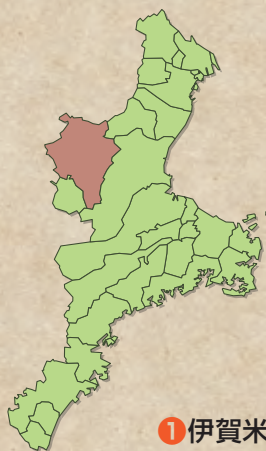


いが 伊賀市



- ① 伊賀米 —— 全域
- ② 松尾芭蕉
- ③ 伊賀くみひも —— 全域
- ④ 伊賀焼
- ⑤ 伊賀国分寺跡(国分寺・国分尼寺)
- ⑥ 伊賀流忍者
- ⑦ 伊賀惣国一揆

特産物

伊賀市

伊賀米

古くから伊賀は良質米の産地として知られており、現在、高品質な伊賀米ブランドとして販売されています。伊賀米は、単に伊賀地方で栽培されている米というだけではなく、栽培管理記録の提出など定義がきちんと定められています。そして、生産者によって土作りなど生産管理が徹底されるなど、良質でおいしい伊賀米を守り、さらに品質を高める努力がされています。品種としては、コシヒカリが約70%を占めていますが、みえのゆめなどの品種も生産されています。また、伊賀の酒造りも有名で、良質の酒米の産地としても知られています。

伊賀で良質のお米を生産することができるのは、盆地という地形や土壌などが大きく影響しています。四方を山に囲まれた盆地は、内陸性の気候で、気温較差が大きく年間平均気温は14℃前後です。昼は温かく、夜は温度がぐんと下がることで、昼間太陽のエネルギーによって生産されたデンプンが、夜の気温の低さで確実に胚乳に蓄積されおいしいお米が育ちます。また、伊賀地域の土壌は、古琵琶湖層群を形成する地域であったため、湖底での豊富な植物が腐食し堆積した、栄養豊かな土壌となっており、いわれています。さらに、淀川の源流となる清らかな水が肥沃な伊賀地域を流れることによって、ミネラルを多く含んだ稲作に適した水となっており、水量も豊富です。



コシヒカリ (JAいがほくふ提供)

【→P111*35】

■ 三重県の農業の特色についても調べてみましょう。

人物

伊賀市

まつおぼしょう

松尾芭蕉

俳句で、日本だけでなく世界でも有名な松尾芭蕉は、伊賀を代表する人物の一人です。伊賀市では、毎年芭蕉の命日である10月12日に、俳聖殿（俳聖とは俳諧の聖人という意味で、芭蕉の生誕300年を記念して建設された、芭蕉の旅姿をあらわした建物）において芭蕉祭を開催しています。また、この芭蕉祭にあわせて顕彰俳句の募集を行っており、毎年中学生も俳句をつくるなど市民の多くが俳句に親しんでいます。

松尾芭蕉は、江戸時代前期の俳諧師で、蕉風俳諧という独自の俳諧を確立させた人物です。俳諧とは、室町時代に始まった伝統的な連歌を、人々が日常使用している言葉を使いこっけい味を加えて詠むもので、季語を入れた17字（5・7・5字）の発句で始め、14字（7・7字）の脇句をつけ、さらに第三句、第四句と連ねていくものです。この発句が明治時代に俳句と呼ばれるようになりました。また、俳諧師とは、俳諧をつくることを専門とする人のことで、俳諧を人々に教える人でもありました。そのため、芭蕉には各地に門人がおり、芭蕉と旅をともにしたり、句会の助けをしたりする人でもありました。杉風、去来、許六などは、その代表的な門人です。

松尾芭蕉は、1644（正保元）年に、松尾左衛門の二男として伊賀に生まれました。19歳で藤堂藩伊賀国侍大将藤堂良忠に仕え、この頃から京都の北村季吟に俳諧を学びました。この頃の芭蕉は俳号（俳諧を作る際に用いる名前）に「宗房」を用いていました。23歳の時に主君良忠が亡くなると、武家奉公をやめました。1672（寛文12）年、29歳で初めての撰集『貝おほひ』を上野天満宮に奉納し、俳諧師として生きる決意をして江戸へと向かいました。1675（延宝3）年、大阪の西山宗因（談林派俳諧の第一人者）を歓迎する句会に出席し、俳号を「宗房」より「桃青」に改めました。翌年、初めて帰郷していますが、以降計12回帰郷したことが記録に残っています。翌1677（延宝5）年、俳諧宗匠（師匠）となり、1680（延宝8）年には深川の草庵に移り住みました。翌年、門人の季下より一株の芭蕉（植物）を贈られ、これが繁茂しました。やがて草庵を芭蕉庵と呼ぶようになりました。これにあわせて、俳号も「芭蕉」を使い始めるようになりました。その後、1684（天和4）年に『野ざらし紀行』の旅に出たのをはじめとして、1687

（貞享4）年には『鹿島詣』の旅と『笈の小文』の旅へ、翌年には『更級紀行』の旅へ、さらにその翌年には『奥の細道』の旅へと出かけています。この五つの旅の全行程は、延べ約4800kmにもなります。1694（元禄7）年には、『奥の細道』の清書本が完成しました。その年、伊賀に帰郷後、大阪に行きましたが、そこで病に倒れ、ついに10月12日に亡くなりました。死の4日前に口述筆記させた「旅に病んで 夢は枯野をかけ廻る」が最後の俳句となりました。



松尾芭蕉

（財団法人芭蕉翁顕彰会提供）



俳聖殿（伊賀市教育委員会提供）

【→P111*49、*50】

■ 芭蕉に関連のある史跡や芭蕉が作ったとされる俳句などを調べてみましょう。

伝統工芸

伊賀市

いが
伊賀くみひも

伊賀を代表する特産品の一つに、くみひもがあります。全国に出回っている帯締、羽織紐の多くが伊賀で生産されています。特に手で組み上げる手組みひもは、全国生産量の大半を占めています。

くみひもの工程は、糸割りと呼ばれる作業にはじまり、染色、糸繰り、経尺、撚かけ、組みあげを経て、最後に仕上げられて製品となります。くみひもを組む台も、さまざまなものがあります。丸組みから平組みの紐まで組むことができる最も便利な台である丸台や、たくさんの玉数が使え、組み目が緻密で美しく繊細な柄模様を表現できる高台などがあります。

くみひもの起源は古く、奈良時代以前にさかのぼるといわれ、経巻、華籠などの仏具・神具や、武士の甲冑や刀の紐などの武具に使用するために作られてきました。伊賀での本格的な生産は、1902(明治35)年に廣澤徳三郎という人が、江戸のくみひも技術を習得して、上野で糸組工場を設立してから始まりました。1976(昭和51)年には、国の「伝統的工芸品」に指定されています。現在のくみひもは、和装をする機会が減ったことで、帯締・帯ひもに限らず、ネクタイやベルトなど幅広い用途にされたり、デザイナーの作品に使われたりもしています。

【→P101】



高台(伊賀くみひもセンター提供)

【→P110*5】

■ 県内にある伝統工芸についても調べてみましょう。

伝統工芸

伊賀市

伊賀焼

伊賀焼の歴史は、奈良時代にまでさかのぼり、平安時代末期から鎌倉時代の初め頃に本格的な焼き物の生産地として発展しました。

室町時代の終わりから桃山時代にかけて茶の湯が広まると、伊賀焼は茶の道具として注目されるようになり、当時、伊賀国を治めた筒井定次が茶人古田織部の門人であったことから、「織部好み」と呼ばれる茶の道具がつくられました。次いで、領主となった藤堂高虎・高次も茶の湯に造詣が深く、茶器・花器が生産されました。これらは、それぞれ「筒井伊賀」「藤堂伊賀」と呼び、二つをあわせて「古伊賀」と呼びます。「古伊賀」は、多くの作品が重要文化財に指定されています。

その後、伊賀焼は一時衰退しますが、18世紀後半に、再び藤堂家によって復興されました。これを、「再興伊賀」と呼びます。

明治時代に入ると、伊賀陶土の特性を活かした耐熱食器が大量生産されるようになり、行平鍋・土鍋などの日用品が多くなるようになりました。1982(昭和57)年に国の「伝統的工芸品」に指定され、現在は丸柱を中心に伊賀各地に窯元が設けられ、日用品から茶器・花器など多彩な焼き物がつくられています。

【→P87、P101】



伊賀焼(伊賀市提供)

【→P110*6、*7】

■ 伝統工芸が抱える課題について考えてみましょう。

史跡

伊賀市

い が こく ぶ ん じ あ と こ く ぶ ん に じ 伊賀国分寺跡 (国分寺・国分尼寺)

仏教によって国をしずめまもることを願った聖武天皇は、741(天平13)年に各国に国分寺と国分尼寺を造らせ、743(天平15)年に奈良の都に大仏をまつる東大寺を造らせました。伊賀国では、どこに国分寺・国分尼寺が造られたのかわかりませんでした。大正時代に『東大寺文書』の一文から、現在の伊賀市西明寺字長者屋敷にあったという考えが示されました。そこは、長者伝説の残る、約62000㎡におよぶ広大な平地であり、その後の調査により、寺域を取り囲む土塁や中心になる建物の土台の存在が明らかになりました。

1923(大正12)年には、国分寺跡より100mほど東の国分尼寺跡である長楽山廃寺跡とともに国史跡に指定されました。近年の調査で、建物や土壇(土台のようなもの)の規模が復元されるとともに、各建物の配置も確認されました。特に、金堂跡・講堂跡と推定される土台は保存状態がよく、現状でも周囲より高くなっているのがよくわかります。



伽藍配置図 (伊賀市教育委員会提供)

■ 伊賀市以外の国分寺・国分尼寺も調べてみましょう。

COLUMN コラム

三重県には、いくつ国分寺があったかな？

奈良時代、三重県は伊勢・伊賀・志摩・紀伊の四つの国に分かれており、それぞれに国分寺がありました。現在「国分寺」と名前のつく寺は県内にいくつかありますが、残念ながら奈良時代に建てられたものではありません。しかし、発掘調査や書物等から当時の様子を考えることができます。

◎伊勢国…国分寺は鈴鹿市国分町、鈴鹿市考古博物館の北側にあり、国府庁(奈良時代の国の役所)と7kmも離れています。1922(大正11)年、国史跡に指定されました。1988(昭和63)年から何度も発掘調査が行われ、東西約178m、南北約184mの寺域の中に金堂・講堂等の建物があったことがわかりました。今後、歴史公園として整備が進められる予定です。国分尼寺跡は国分町の集落にあると思われます。

◎志摩国…国分寺は志摩市阿児町国府にありました。現在の国分寺は江戸時代の末に造られたものです。国府庁もこの地にあったと考えられていますが、発掘調査等は行われておらず、詳しいことはよくわかっていません。

◎紀伊国…尾鷲市・熊野市は、紀伊国の一部でした。紀伊国の国分寺は、和歌山県紀の川市打田町にありました。1978(昭和53)年から発掘調査が行われ、塔跡の礎石などが保存され、歴史公園として整備されています。

歴史

伊賀市

い が りゅうにんじゃ
伊賀流忍者

映画やテレビ漫画でおなじみの「忍者」は、今や全世界で日本のイメージを代表するものとなっています。しかし、黒装束に身を包み、空を飛んだり消えたりと、まるでスーパーマンのようにイメージされるなど、間違った解釈です。戦乱の時代に必要とされ発達した忍術は、日々情報を収集し、その情報から変化を読み取り、その変化に対して、謀略などで敵を混乱させて兵力を弱めることが役目でした。

伊賀国では、戦国期に大きな勢力に対抗するために、伊賀惣国一揆という組織を結成していましたが、天正伊賀の乱で織田信長勢と戦い、一揆は滅びました。この頃から、伊賀者は全国に散らばり、各地の大名に用いられていきました。江戸時代になると藤堂藩は、伊賀者が他藩に仕えることを禁止し、藩内では主に参勤交代で藩主と同行し、藩主を守る役目を担当させましたが、明治時代になると忍術的な組織は消滅していきました。伊賀の有力な忍者として服部半蔵、百地丹波守、藤林長門守の3人が知られています。また、忍術秘伝書として『萬川集海』などがあります。



伊賀流忍者博物館 (伊賀市役所提供)

【→P110*4】

- 服部半蔵、百地丹波守、藤林長門守について詳しく調べてみましょう。

歴史

伊賀市

い が そうこくいっ き
伊賀惣国一揆

戦国時代末期の伊賀守護仁木長政は、伊賀国内の多くの領主・土豪(村落のリーダー)を従えていましたが、実質的な勢力範囲は、阿拝郡の西半分(旧上野市域)にも満たない狭いものでした。そのため、仁木氏に代わり伊賀国を支配したのは、伊賀一国規模の領主・土豪の一揆である伊賀惣国一揆でした。

惣国一揆の政庁は、仁木氏の城郭丸山城(後の上野城西之丸)より上手で後の上野城本丸に存在した平楽寺城でした。仁木氏の城郭が、あたかも平楽寺城内といってもよい立地だったことから、当時の仁木氏は実質的に惣国一揆の監視下に置かれていたことがわかります。

1569(永禄12)年に織田信長の伊賀侵攻の危機に直面した惣国一揆は、霜月(11月)16日付の伊賀惣国一揆掟書(神宮文庫所蔵『山中文書』)を作成して、緊急時の防衛体制を固めました。惣国一揆は、1579(天正7)年に南伊勢の大名北畠信雄(信長の次男)の軍勢を撃退することに成功しましたが、1581(天正9)年には信長の総攻撃によって敗退しました。伊賀惣国一揆と織田政権との戦いは、「天正伊賀の乱」とよばれています。



土豪の城館の面影を伝える民家

- 伊賀惣国一揆以外の国一揆について調べてみましょう。